人文フォーラム

39

2013.8

CONTENTS

巻頭言
山野千枝子のこと　人文学部長　郡司　淳……1
Essay［新任教員紹介］
はじめまして　井野　葉子……2
地域との対話を通して　村中　亮夫……4
人文学部開設 20 周年記念シンポジウム
「人文学の新しい可能性」をふり返って　安酸　敏眞……6
第 10 回日本文化演習　報告 / 体験記……8
ウェールズ・カーディフ大学での日本語教育実習プログラム参加報告……12
ゼミ室紹介
1 部　日本文化学科　菅ゼミナール……14
卒業生通信
初心忘れず　若狭　知里……16
大学院の窓
大学院は「なるほど」がいっぱい　小川ゆう紀……17
研究、その足跡……18
人文学部第 17 期生　卒業研究題目一覧……21
編集後記……裏表紙

北海学園大学人文学部

巻頭言

山野千枝子のこと

人文学部長　**郡司　淳**

山野千枝子（1895 − 1970）は、1922 年アメリカで美容術を学び帰国、翌年丸ビルに美容院を開設した日本の美容師の草分け的存在です。その自伝『光を求めて』（1956 年）は、美容を「かくされている個性美をひきだし、失われた美をとりもどすこと」と断じています。この山野による「個性美」の発見は、従来の男性による女性美の規範を解体することで、女性一人ひとりによる主体的な美の創造を可能とさせたのでした。

山野が「個性美」を唱えた背景には、第一次世界大戦後の時代風潮があります。総力戦となったこの戦争は、女性を軍需工場をはじめとする重化学工業部門に動員することになりました。この結果、戦後には、大戦前ニュージーランドやオーストラリア、北欧の一部の国々にしか存在しなかった女性参政権が交戦国各国に拡大していきます。それは、参政権がギリシア民主政以来、兵役義務と一対のものとみなされてきたからにほかなりません。さらには、イギリスで離婚率が戦前の 3 倍に上昇したことに象徴されるように、不十分ながらも女性が経済的に自立しうる社会的な条件が整えられていきました。日本で山野ら「職業婦人」と呼ばれる女性が登場したのもこの頃です。

こうした女性の社会進出は、戦時経済が衣服の合理化を要求したこととも相俟って、コルセットやバッスルで女性の身体的特徴を強調した 19 世紀風のスタイルを過去のものとし、ショートスカートをはじめとするシンプルで機能的なデザインの衣服を誕生させます。また断髪も、大戦に動員された従軍看護婦にはじまり、戦後にはパーマネントウエーブとともに広く女性一般に普及していきました。ちなみに日本で、明治政府が女性に禁じた断髪を初めて実行したのは、「毛断蛙」（モダンガール）と呼ばれた若い女性たちです。いわば女性は、社会で生き生きと活動する主体として、それまで男性の視線のもとにあった身体を自らに取り戻したのでした。山野が「個性美」追求の一環として化粧品会社と提携し、従来の白壁のような厚化粧からできるだけ自然に近い化粧法――ナチュラルメイクを考案したのも、こうした時代風潮に棹さすものであったといえます。

かくて新たな時代を切り拓いた山野は、女性の「美とちからと魅力」の源泉に「高い大きなこころざし」をおいています。「女性のこころざし、という以上は、もちろん男性のそれとは、いくぶんかちがっていましょう。恋愛や結婚にかんするあこがれや夢もふくまれているにはちがいありません。けれども、そればかりでは、こころざしとは言えますまい。美しい恋愛、きよらかな志操、そしてしあわせな結婚だけが、目的のすべてではなく、そういう行為と生活の成果によって、人間社会に、各自大きな光明とうるおいをプラスしてゆくこと。――その善意と理想が、すなわち女のこころざしそのものであってほしい」、と。このように山野は、「一家の経済は決して私事」にあらずとして、家計簿による生活の合理化から社会的連帯に基づく豊かな社会を構想した羽仁もと子と同じく、己が生涯の仕事とした美容という世界の果てに人間社会の幸福を見据えていました。まさに、この高き志こそが、いわゆる「フランス人権宣言」に端的に示されるように、出発点から女性差別を構造化していた近代という時代にあって、山野に人間らしい生き方を可能とさせた源泉であったといえるでしょう。

現在、わたくしたちは、男性は無論のこと、女性も山野の時代よりはるかに恵まれた社会条件のなかに生きています。そうであるならばなおのこと、学生諸氏には、大学で生涯を賭けて学ぶに足る研究テーマを見出すとともに、それを単に自らの幸福追求にだけでなく、社会のために活かす志をもってほしいと思います。そのためには、文学や歴史学といった専門分野がなぜ「人文学」の名を冠した学部に存在するのかを今一度確認する作業が求められるでしょう。

「太平洋をのむような、地球をかい抱くような、大きなこころざしを」（山野千枝子）。

[新任教員紹介]

はじめまして

日本文化学科准教授　**井野　葉子**

幼い頃、礼文ちゃんという名のヒロインが出てくる少女漫画（注）が好きだった。礼文島にちなんで名付けられた礼文ちゃんは「北海道ではスズランの花が咲くの！　水芭蕉も咲くの！」と目をキラキラさせながら語るのである。その場面を心に深く刻み込んだまま、何十年もの歳月が流れた。

三月に神奈川から札幌に転居して四月に本学に着任、目の回るような忙しさの五月、私はわずかな時間をみつけて電車に飛び乗り、水芭蕉の咲く湿地帯へと走った。初めて見る水芭蕉の花は、清らかに凛としたたたずまいで、澄んだ水の上に咲いていた。また、スズランとの初めての対面には不意打ちを食らった。自宅近くを散歩していると、街路樹の下にスズランとおぼしき花が咲いているではないか。しゃがんで鼻を近づけると、かぐわしい香りがする。透き通るような濃い緑の葉に、鈴なりに吊り下がった白い花。公園などで保護されているとばかり思い込んでいたのに、道端に無造作に咲いているとはおそれいった。

こうして、少女時代からの憧れの花を見ることができ、また、関東とは違う順番で咲く花々や、関東の市街地ではめったにお目にかかれないカタクリ、ライラック、ルピナスなどの花を見ることができて、初めての札幌暮らしは大興奮の日々である。毎日、毎日、見たことのない花が次々に咲く。いつ何時どんな花に出会えるか、毎日カメラを持ち歩いて花の写真を撮ることが最大の楽しみである。

山や海や湖などの美しい自然の中を歩くことが好きだ。木漏れ日を浴びて、草木の香りをいっぱいに吸い込みながら、美しい自然の風景を眺めていると、日頃の雑事にまみれている心が洗われていく。札幌の人となった私、神威岬に行きたい、一面のひまわり畑を見たい、オンネトーの湖畔を歩きたい、などなど、これから北海道の自然を満喫できるかと思うとわくわくする。また、世界遺産をめぐる海外旅行も大好きである。これまで訪れた国は、エジプト、トルコ、イタリア、スペイン、カンボジアなど二十カ国ぐらい。目下のところ、イスラムのアラベスク模様の美しさに魅了されている。我が人生、あとどれだけ海外旅行ができるか。時間と体力の許す限り、一つでも多くの世界遺産をこの目で見たい思う。

特技は朗読。高校生の頃、放送部の活動に青春の情熱をかけていた。音声だけの番組や放送劇を作ってコンテストに出す。コンテスト前になると、番組作りは連日深夜に及び、終電で帰宅するのが常だったが、警備員の目を盗んで学校の塀を乗り越えるのが無性に楽しかった。なぜか、ヒロインの役はまわってこず、ヒロインのお母さん役ばかりやっていた。コンテストでは朗読やアナウンスの部門もあり、それを目指して発声、発音、滑舌、抑揚、原稿読みの練習を毎日する。私が出場したのはアナウンス部門。NHK 杯全国高校放送コンテストの神奈川県大

会で六位に入賞し、渋谷の NHK で行われる全国大会に出場したのが、唯一の自慢である。

研究の話もしよう。私の専門は源氏物語。源氏物語第三部の宇治十帖は、政権争いに敗れて没落した宮家の姫君たちと、不義密通の結果産まれた青年薫との、不毛な恋の物語である。「憂し」（悲しいという意味）と掛詞になる「宇治」が舞台で、恐ろしい宇治川の流れと立ちこめる霧の深さが、作中人物たちの心象風景となっている。人の心と心は決して通い合うことはなく、愛を求めて伸ばした指先はむなしく虚空を掴むだけ。はかなく途切れる人と人との繋がりは、夢の浮橋の如し。私は元来うじうじと暗い性格だからか、この暗い宇治の世界観に心惹かれてしまうのであった。

深山路（みやまぢ）のおきその霧に踏みまどひ
　　たづねとめゆく宇治の言の葉

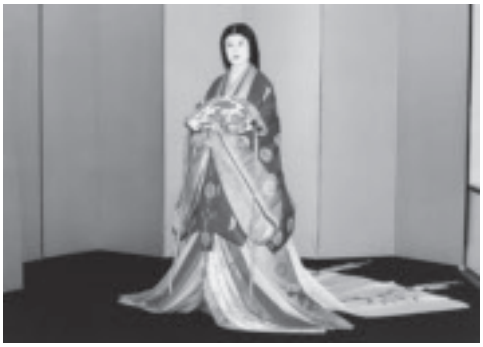
二十代前半に宇治の言葉の作りだす迷宮に足を踏み入れて以来、宇治の霧に迷い、迷わされてきた長い年月、ぽつり、ぽつりと書き溜めてきた論文をまとめて著書として刊行したのが、『源氏物語　宇治の言の葉』（森話社、2011 年）である。

著書刊行を目前にして東日本大震災が起きた。大きな揺れとともに電気が停まった。その晩、真っ暗闇の中、懐中電灯の光で最後の校正をした。その後も計画停電が続いた。まだ東京が混乱している最中、水と食料を背負って上京、本の装幀に使う布のサンプルを見に行った。東北地方にある紙の工場が被害を受けて、本を作るための紙の供給があやしくなった。本当にこの本が刊行できるのか。この本が出来上がったら死んでもいいと思った。そのような格別な思いとともに出来上がった本は、親バカよろしく、かわいくてたまらなかった。カバーには松岡映丘の絵画「春光春衣」を使い、秋から冬へと厳しい季節を生きる姫君たちに対して、柔らかな春の光と春の衣をまとってほしいという願いを込めた。このカバー、図書館に入る時に剥がされてしまうので、ここに写真を掲げておく。

著書のカバー

去年の三月、都から宇治までの道を完歩した。宇治十帖において、薫は、宇治の姫君を訪れるために、都と宇治との間を往復する。その行程をこの足で歩くことは、かねてからの念願であった。光源氏邸のモデル河原院跡から出発して、伏見稲荷を突っ切り、霧かかる竹やぶの木幡山を越えて、宇治まで約八時間。そして、今年の三月には、さらに宇治から南下して木津まで六時間。今後も、さらに南下して初瀬寺詣で、逢坂山の関所越え、雲母坂（きらざか）登って比叡山……ああっ、忙しいっ。

（注）幼い日のことなので、もう誰の何という漫画かわからなくなっていたが、近頃、懐かしくて調べたところ、前原滋子「鈴蘭の花かおる」（講談社コミックスフレンド、昭和 50）であることがわかった。


京都にて

Essay

［新任教員紹介］

地域との対話を通して

日本文化学科准教授　**村中　亮夫**

2013年4月に本学人文学部に赴任して参りました村中亮夫と申します。私の専門は地理学で、そのなかでも社会調査や地理情報システム（GIS）を活用した地域の景観・環境に関する定量的研究に取り組んでいます。具体的な研究課題は、①景観・環境を保全することで生まれる価値を経済的に評価する環境経済評価研究、②地域住民とともに身近な地域の防災・安全を考える取り組みに関する研究です。

地理学では古くから景観や環境に関心が持たれ、これまで、例えば古都や宿場町における歴史的な都市景観の保全や、農林業の担い手不足に伴い荒廃していた里山の再生／保全の問題など、地域の社会や経済、文化、歴史など、様々な側面から地域の景観・環境に関する議論がなされてきました。しかし、そこでは景観・環境の定性的な側面のみが強調され、それらを保全するにあたっての妥当性を検証する定量的な側面からのアプローチに乏しいという問題点がありました。この問題を克服したいとの思いから、学部時代の卒業論文では日本における代表的な農村景観のひとつである棚田景観に着目し、その保全により生まれる価値を定量的に評価する環境経済評価研究に取り組みました。

環境経済評価にはいくつかの手法がありますが、評価に利害関係者となる地域住民の意識を反映させたいと考え、仮想評価法（CVM）と呼ばれる手法を用いた研究に取り組みました。CVMとは、環境の質を維持または向上させるという仮想のシナリオを地域住民に提示し、その環境保全のために最大でいくらまで支払っても良いと思うかという地域住民の支払意思額に基づき、環境の価値を定量的に評価する手法です（図1）。この手法を用いて、これまで高知県や山口県、兵庫県など、様々な場所における地域の景観・環境の保全に関する研究に取り組み、修士論文・博士論文を執筆しました。

図1　支払意思額

ただ、この定量的なデータ解析に依拠した調査研究のみではどうしてもある程度の抽象的な議論になりがちであり、実際に地域で起きている景観・環境問題を具体的にどのように解決に導けば良いのかについて、地域の住民や行政と対話する機会は限られていました。こうした状況が一変したのは、2009年から私の恩師である中谷友樹先生と共同で始めた、京都府亀岡市との地域連携の取り組みがきっかけでした。

亀岡市は、京都市西方の観光名所である嵐山や保津峡を挟んで西側に位置する人口10万人弱の都市です。亀岡市の拠点駅であるJR亀岡駅はJR京都駅から山陰本線で約20分であり、亀岡市は京都市への通勤・通学に便利な地域として、1970年代頃から宅地開発が進められました。これに伴い亀岡市に市外から新住民が流入し、地域コミュニティの希薄化が懸念されるようになった経緯があります。私たちが地域連携でお世話になった自治会は、亀岡市のなかでも最も京都市寄りに位置する、比較的、都市開発圧の強い地域の篠町自治会です。篠町では上述の問題を受けて、2004年頃から自治会

図２　作成した安全安心マップの１つ

が中心となって、防災・安全活動を中心とする地域コミュニティの活性化に資する取り組みが行われていました。

私たちは地理学を専門とする教員・院生の集まりであったことから、篠町の防災・安全活動のひとつとして、地図を活用した取り組みのお手伝いをすることになりました。具体的な内容は、地域住民の参加のもとで地域の危険箇所や安全箇所を調べるフィールドワークと、そこで得られた情報を地図に書き込んで住民オリジナルの「安全･安心マップ」作成のお手伝です（図2)。この安全安心マップが作成された後、マップは地域の PTA やすべての自治会加入世帯に配布され、地域の危険箇所の改修や落書きの消去などに活用されたとのことです。

私たちはこの取り組みを亀岡市内に広めるべく、その後も近隣の自治会で同様の取り組みを行ったほか、亀岡市内にある高等学校との高大連携の取り組みとして、総合的な学習の時間を活用した通学路の安全安心マップ作成の取り組みを行うなど､一般市民の皆さんと地域の防災･安全をめぐる対話を行う機会も得られました(図 3)。

また、時期を同じくして、日本三景の１つである天橋立のある宮津市の教育委員会から、宮津市の文化財として天橋立を保全するための調査研究のご依頼をいただきました。この調査は天橋立とその周辺地域を文化庁の指定する重要文化的景観に認定してもらうための基礎的な調査ですが、その景観に対して地域住民がどのような価値意識を持っているのかについて調査することが私に課された役割でした。そこでは私が研究を始めるきっかけとなった CVM による調査が求められ、CVM を活用した初めての本活的な地域連携活動となりました。

以上、自己紹介として私のこれまで取り組んできた研究活動を述べさせていただきましたが、これらの研究活動を通して学問的な理論と実社会の現実との対話の難しさと重要性を学んできたように思います。とりわけ博士論文を執筆するための研究を行っていた院生時代には分析データとの対話が主となり、そこで得られた結果を実社会にどのように還元できるのかを考える余裕もありませんでした。

地理学は「場所と空間の科学」とも呼ばれますが、地理的な諸問題は地域の「現場」で起きており、その問題を考えるにあたっては、理論研究と同時に、実際に地域の「現場」から得られたデータに基づく実証研究も重要です。私はこのような科学的データに基づく地域との対話を通じて地域に住まう方々との信頼関係を築き、これからも地域に貢献できる研究に取り組んで行きたいと思っています。

図３　高大連携による安全安心マップ作成の授業

人文学部開設 20 周年記念シンポジウム

「人文学の新しい可能性」をふり返って

英米文化学科教授　**安酸　敏眞**

さる 5 月 18 日、東北大学の佐藤弘夫教授と京都大学の芦名定道教授をゲストとしてお迎えして、人文学部開設 20 周年記念シンポジウム「人文学の新しい可能性」が開催されました。当日は 100 名近い外部からの来場者があり、会場の 7 号館 D30 教室は熱気に包まれました。木村学長のご臨席を賜り、また在学生に加えて他学部の先生方、卒業生、退職教員なども参加され、まさに 20 周年記念行事にふさわしいイベントになりました。

実学志向の強い本学に人文学部が開設されたのは、いまから 20 年前の平成 5（1993）年のことです。人文学は、学問一般の歴史と同じほど古い、老舗中の老舗ともいうべき学問分野ですので、これによって本学にもようやく大学らしいアカデミックな雰囲気が生まれたといわれます。それと同時に、女子学生の比率が飛躍的に伸びて、キャンパスが一気に華やかになったようです。そういう意味では、人文学部が本学の発展全体にとって一定の役割を果たしてきたことは、おそらく間違いないでしょう。

しかしより広い視野で考えれば、20 世紀から 21 世紀にかけて、実証的学問である自然科学と社会科学の分離・独立、科学技術の進歩、そして市場原理経済の進展などによって、実証性、客観性、効率化、実用性が学問研究の第一の評価基準となり、伝統的な人文学はいつの頃からかすっかり窓際族になりました。人文学部での研究・教育活動は、実利的な観点に馴染まない基礎的なものがほとんどですので、実利的な側面から学問を判定する傾向が強まるにつれて、段々格付けが下がったわけです。ところが、人文学の有用性が疑問視されるなかで、あの東北大震災と福島の未曾有の原発事故が起こりました。《3・11》の大惨事をどう受けとめるかということは、各人の立場や利害によってまちまちですが、科学技術の進歩と経済発展を最優先してきた近・現代人のあり方そのものに、重大な警鐘が発せられたことは間違いありません。その反省として、人間同士の絆や連帯が目下見直され、全国各地で地球環境との共生という謙虚な人間の生き方が模索され始めています。

ところで、わが人文学部は開設当初から「新しい人文学」を標榜し、「新人文主義」の理想を高く掲げてきました。それは近代のヒューマニズム文化が落ち込んだ隘路を脱却し、人間を超えたものに場所を与えつつ、自然ならびに他者との共生を実現するような、人文学の新しい学知の追求を言い表したものです。この開設以来の学部の理念を、現在の状況にシンクロさせながら、いかにして具体的に展開していくべき

か。これまでの学部 20 年の歩みを踏まえながら、「人文学の新しい可能性」を、あるいはより積極的に、「新しい人文学の可能性」を考えてみたい。そういう問題意識から、今回のシンポジウムは企画されました。

人文学のことを英語では humanities と言いますが、そこからわかるように、人文学は人間とその文化を対象とする学問です。それはすぐれて人間形成と人間の生き方に関わっています。科学を営むのも経済活動をするのも人間ですから、どんなに科学技術が長足の進歩を遂げ、社会が大きく変化しようとも、人文学が不要になることはないはずです。しかし科学技術の進歩発展や社会の構造的変化に伴って、われわれ人間の知のあり方も大きく変化しました。インターネットやスマートフォンの登場は、教育現場にも激変をもたらしています。今や書物というメディアを通じて精神を陶冶しようとする従来の人文主義の理念は、大きな壁にぶち当たっています。インターネットによって、居ながらにしてさまざまな情報にアクセスでき、人類の知の遺産を共有できるようになると、かつてのような文献学的修練や「真理への献身」は必要なくなります。コンピュータのキー操作一つで大量の情報や知識を処理できるようになると、古典語や外国語をコツコツと習得する努力も、図書館や古文書館で資料を漁って調査する骨折りも無用になります。従来の人文学は、そういうたゆまぬ学問的な修練や努力そのものが、人間形成に役立つと考えてきましたので、従来の人文学の理念とモデルは今日大きな見直しを余儀なくされているわけです。はたして人文学は何を根本原理として自己再編すべきであろうか？　人文学にはいかなる学問的使命が託されているのであろうか？　人文学は現代社会に何を提言できるであろうか？

京都大学の芦名教授は、「現代日本における人文学の課題―キリスト教研究の視点から―」と題して発題され、「科学技術・市場原理を突き放し対象化する」のは人文学の重要な役割の一つであり、過去の「記憶・知の保存と批判」はすぐれて人文学が担うべき課題である、と語られました。東北大学の佐藤教授は、「神・人・死者―日本列島における多文化共生の伝統―」と題して発題され、われわれは「《世界》の構成員として人間のみが突出する近代の異形性」を自覚すべきであり、「神や仏や死者（ご先祖様）もまたともにこの世界の構成者であった」時代がかつて実在したことを認識することで、現代人の立ち位置を相対化する必要がある、と主張されました。パネリストの一人としてご奉仕くださった本学のアイトル教授は、「文学の変化と応答」と題して発題され、科学主義・実証主義・実用主義には明らかな欠陥があるので、「こころに自由を与え、イマジネーション、想像力を培う」詩・文学の役割が、今こそあらためて再認識されなければならない、と力説されました。

予定されていた 3 時間はあっという間に過ぎ、いささか不完全燃焼の形でシンポジウムは幕を閉じましたが、人文学の価値は現代においてもいささかも減じていないとの確信を、シンポジウムの立案者・司会者として、強く抱いた次第です。それと同時に、人文学部が取り組むべき課題と今後の方向性が明確になったと思います。言語教育に支えられた全人的陶冶の理想、あるいは言語的・文学的「教養」を通じての人間の自己超越的「形成」の理念は、たしかに古びた側面もないではありませんが、今日の「知識社会」においても、本質的にその基本的な価値を失っていません。問題はこの確信を具体的な教育課程にどう反映させ、いかなる人材を実際に育て上げていくかです。

第 10 回日本文化演習
報告／体験記

北海道の若き学徒による「京・阪・奈＋滋賀」新感覚見聞

教務委員　寺田　吉孝

平成 24 年度の第 10 回日本文化演習は、平成 25 年 2 月 18 日(月)から 23 日(土)まで 5 泊 6 日間の日程で、奈良、京都、大阪、滋賀方面で実施されました。参加者は 1 部 23 名、2 部 4 名の総勢 27 名の学生諸君でした。引率には、テレングト・アイトル、大石和久、田中綾、寺田吉孝の 4 名があたり、さらに、㈱ブルーツーリズム北海道の浦口氏が全行程添乗しました。新千歳空港出発時、雪の影響で離陸の遅れが危惧されましたが、幸いにも大きな遅延なく無事関西空港に到着できました。しかし、現地では冷たい雨と湿った雪が待ち構えており、寒さに強いかと思われた道産子の学生たちも震える毎日でした。しかし、風邪をひく者もなく、また全期間を通じて大きなトラブルもなく無事に演習を終えることができました。今回の研修日程は表の通りです。

昨年の 12 月には、引率教員 4 名がガイダンスと講義を実施し、現地での研修が充実したものになるよう事前指導（専門的、一般的）を行いました。これらを踏まえ、受講生たちは自主研修時の計画を立て、事前レポートの形で提出しました。

昨年よりも大幅に参加人数が減り、日本文化演習に対する学生たちの関心が薄れてきたかのように思われました。しかし、参加した学生たちは、意外と言っては失礼ですが、意欲的な行動の 6 日間を過ごしてくれたと思います。ふだん京都、奈良、大阪を訪れる機会のない北海道の若者たちは、新鮮な感覚で「京・阪・奈＋滋賀」のもろもろの事物に直に触れてくれたと思います。

永井一彰先生（奈良大学教授）の講演風景
（奈良大学演習室）

	月日	移動・研修	日程	宿泊
1	2/18（月）	移動 団体研修	新千歳空港（12：00 発）→関西空港（14：15 着）〈JAL2508 便〉 空港→飛鳥・石舞台古墳→飛鳥寺→ホテル〈貸切バス〉	奈良泊 （ホテルフジタ）
2	2/19（火）	団体研修	ホテル→興福寺→奈良大学（永井一彰教授の講演、大学博物館見学、学生食堂にて昼食）→朱雀門→平城宮跡→平城宮跡資料館→自由行動（東大寺、春日大社など）→京都へ〈貸切バス〉	京都泊 （ザ・パレスサイドホテル）
3	2/20（水）	自主研修	学生各自で行動	京都泊 （ザ・パレスサイドホテル）
4	2/21（木）	団体研修	彦根城→近江八幡（新町通り、郷土資料館、八幡堀）→比叡山・延暦寺（根本中堂）〈貸切バス〉	京都泊 （ザ・パレスサイドホテル）
5	2/22（金）	自主研修	学生各自で行動	京都泊 （ザ・パレスサイドホテル）
6	2/23（土）	団体研修 移動	ホテル→国立民族学博物館（斎藤玲子助教による講演を含む）→大阪ミナミ→空港〈貸切バス〉 関西空港（19：50 発）→新千歳空港（21：40 着）〈JAL2513 便〉	

斎藤玲子先生（民族学博物館助教）の講演風景
（国立民族学博物館セミナー室）

雪の彦根城をバックに記念撮影

研修を終えて

1部　日本文化学科　3年
高橋　尚子

見慣れた北海道の雪景色から離れ、訪れた2月の京都。6日間の研修は京都の文化に触れる旅であると共に、京都の底冷えする寒さに耐える旅でもあった。残念なことにほとんどの日が悪天候で、雨や雪が降り続いている中を歩き、建物の中に暖房があれば一目散に暖房のそばへ走っていた。そんなこんな京都旅。

2日間設けられた自主研修では伏見稲荷大社を訪れることを1番心待ちにしていた。ここは全国に3万社あるといわれる稲荷神社の総本宮であり、観光ガイドやテレビでも取り上げられる京都の名所とされている場所だ。私自身、事前に写真を目にしていたが、実際に目で見ると全く違うものであった。特に千本鳥居は中を通ると視界が朱一色に染まり、鳥居と鳥居の隙間から太陽の光が差し込んでくる。とても神秘的な空間であり、実際に訪れないと感じることのできない迫力があると感じた。その後、奥社奉拝所まで行き、おもかる石を持ち上げ、予想以上の重さに落胆しつつ稲荷山を巡拝する参道へ足を運んだ。山の参道全体には数えきれないほどの鳥居が並んでおり、その光景は圧巻であった。願い事が「通る」あるいは「通った」御礼の意味から鳥居を奉納する習慣が江戸時代以降に広がったため伏見稲荷大社には多くの鳥居があるのだ。一本一本よく見てみると、昔に奉納された、色褪せ地盤にヒビが入っている鳥居から、つい最近奉納された真新しいものまであり、現在まで続いている日本の歴史を感じることができた。

自主研修では京都の寺社を中心に歩いて散策したのだが、北海道に比べて京都には寺社が街中に多くあると感じた。私はこれまで日常生活とは別に切り離して特別なものとして神道や仏教をとらえていたが、京都の人々には当たり前のものとして生活に根付いているのではないだろうかと思うのだ。このような京都の文化を自分の足で訪れ、目で見て肌で感じることができた研修であった。

研修旅行の思い出

1部　日本文化学科　3年
石原　若奈

私はこの研修旅行で、いくつかの貴重な体験をしました。その一つとしてまず挙げられるのは、伏見稲荷神社へ参拝したことです。

二人の友達と一緒に訪れた伏見稲荷神社ですが、まず出迎えてくれたのは狛犬ではなく二対の狐でした。伏見稲荷には数多くの社がありましたが、そのほとんどには二対の狐が必ずと言っていいほど作られていました。

伏見稲荷神社で最初に感動したのは、やはり千本鳥居です。ずらりと並んだ朱色の鳥居はずっとずっと奥まで続いており、終わりが見えないほどです。

しかし、奥の方へと進めば進むほど、多かった参拝客はみるみる減っていきました。それに比例するように周囲もどことなく静まり返って、神秘的な雰囲気が漂い始めます。途中で見つけた茶屋で休憩をはさみつつ、ぜぇはぁと息を切らす友人を励まし、山頂に向けて登り続けました。

ようやくたどり着いた山頂には小さな社が一つぽつんとありました。標高 233 メートルという高さもあって、下の方ではたくさんいた参拝客もほとんどおらず、私たちのほかに 2 組ほどしか見ませんでした。

そして、上ったということは次は下りねばなりません。下りは勢い余って転ばないように気を付けながら、上りとは違う道を選んでいきました。その道中では誰かが餌をやっているのでしょう、食事中の猫に遭遇しました。二匹ほど近づいても逃げない猫がいたのでそっと撫でつつ、ようやく最初の鳥居まで戻ってきたころには全員へとへとになっていました。

伏見稲荷神社の山頂まで登ることは体力的にも精神的にも、時間的にも大変なことでしたが、とても貴重な体験ができたと思います。できることならまた伏見稲荷神社の山頂まで参拝しに行きたいと思いました。

京都にはまだまだたくさん、研修旅行の期間だけではまわりきれない魅力的な観光地があります。いつかまた、伏見稲荷をはじめ、八坂神社や祇園方面など、行ったことのない京都の顔を見に行きたいと思います。

古都京都の文化と景観

1部　日本文化学科　3年
峯本　慎太郎

2月、暦の上では春だが北海道ではそれを感じることはできない。そのような季節に古都京都などを巡ることとなった。私は京都ならではの歴史的建造物と、自然が重なる景観を楽しみたいと思いこの旅行に臨んだ。

自主研修1日目では、嵐山へ行った。嵐山は景観がきれいなことで有名で、桜や紅葉などで時期によっては大変賑わう観光地となっている。当然、京都ならではの寺社などもたくさんあり、京都の文化に触れる目的なら必ず行きたいと考えていた場所だ。

最初は渡月橋からの景観を楽しむことにした。渡月橋は、9世紀中ごろ平安時代に道昌という僧によって建てられた橋で、京都の桂川を渡るために重要な交通路として古くから重宝されている。また、『桂川』という作品で重要なモチーフとして登場するなど、嵐山でも象徴的な建造物として扱われていることが理解できる。当日は天候が不安定で、せっかくの景観を楽しめるかどうか不安だったが、運よく晴間に訪れることができ、桂川から嵐山を一望して渡月橋を観ることができた。桂川に架かる渡月橋は、しっかりとした存在感を出しているが、桂川から一望できる景色に溶け込んでいた。私が見たいと考えていた京都の景観であり、とても感動した。

続いて嵐山にある天龍寺を巡った。天龍寺は室町時代に足利尊氏が後醍醐天皇を弔うために開基した寺で、古都京都の文化財として世界遺産にも登録されている。この寺では、庭園がとても趣がある特徴的なものとなっていた。文化財に指定されるだけあって、非常に穏やかな景色と共に嵐山を観ることができ、冬の寂しい木々にも関わらず、美しさを感じることができた。いつか紅葉や桜がきれいな時期にもう一度訪れたいと思うような美しい場所が嵐山だと今回思うことができた。嵐山のメインストリートはかなりの賑わいを見せていて、京都らしい土産物や食事など数多く取り揃えている。それらは見ているだけで楽しく、観光地京都としての側面を味わえた。

自主研修2日目はまず北野天満宮に行くことになった。北野天満宮は全国屈指の知名度を誇る神社で、多くの観光客で賑わう神社だ。平安、10世紀初めにできた神社で、10世紀後期に一条天皇から「北野天満宮天神」の称が贈られ、その後多くの歴史的な人物から崇拝を受けた神社である。普段は多くの人で賑わうが、私は朝一番で向かったため人は少なく、境内をゆっくりと静かに回ることができた。国宝である本殿や、その他の境内にある建築物も趣があり非常に見応えがあるものだ。しかし、それ以上に境内の一部では、梅が咲いており、北海道とは違い春を感じさせる風景に非常に感動した。25日に天満宮では、梅花祭というものをやっていたらしく、少し時期がずれていたのが惜しいと感じた。しかしそれ以上に春という季節を京都で味わうことができ満足することができた。

続いて向かったのは銀閣寺。正式名称は慈照寺で、室町時代後期に8代将軍足利義正が将軍職を辞した後に作ったものである。この慈照寺は主に書画や茶の湯など東山文化を代表する建造物だ。金箔が貼られている金閣に対し、銀閣も銀箔を貼る予定だったなどと言う説もある。しかし、今回見学した限りでは、黒漆塗りの建物であってよかったと私は考えた。というのも、この銀閣は東山の風景にとても馴染んでいて、自然と文化の調和を感じたからだ。もし銀箔など貼られていたら、華やかではあったかもしれないが、その調和を感じることはなかったのではないだろうか。境内から見る景色もよかったが、何より感動したのは参道にある展望台から一望できる銀閣寺一帯と、京都の街並みだった。銀閣は趣のある、まさに東山文化を代表する美しい作りだ。その建築物と、広く遠くまで京都の街並みが見渡せる展望台にはとても感動した。高いところから見るきれいな景色なら他にいくらでもあると思うが、歴史を感じつつ落ち着いた雰囲気を観ることができるのはここだけなのではないかと考えたほどである。

この他にも古都京都の文化と景観を共に味わえる場所はたくさんあると思う。桜や紅葉がきれいな時期に個人でこの地を訪れたい。同じ場所でもまた違った雰囲気を、まだ足を運んでいない場所では新たな感動を得られるだろう。

ウェールズ・カーディフ大学での日本語教育実習プログラム参加報告

日本文化学科教授　**中川　かず子**

英国ウェールズ地方の中心都市カーディフ市にあるカーディフ大学（University of Cardiff）日本研究センター（ビジネススクール内）で毎年行われる「日本語教育実習」。北海学園大学生の参加は今年で５回目となりますが､２月 18 日～３月 15 日まで３名の学生（日文１名､英米２名）がカーディフ大学教授による講義・演習、日本語授業の見学、英語学習、日本語教育実習を体験してきました。以下は学生からの報告です。

◇◇

１部　日本文化学科　2013 年卒　**竜野　征一郎**

私は日本語教育に興味を持ち、この実習に参加しました。英語にはあまり自信がなく、どのように接すれば良いかわからず緊張していた私を、ホストファミリーは優しく迎えてくれました。ステイ先にはカタールやポーランドからの留学生もいて、共通語である英語を使ったコミュニケーションの実践の場となりました。

４週間の実習のうち、２週間は英語学校で、色々な国の生徒と一緒に英語の授業を受けました。生徒が自分から話すことを重視した授業でした。皆が自由な発想で考えた発表はどれも面白く、楽しみながら英語を学ぶことができました。

４週間の残りの２週間は、日本語教育について学びました。日本語の授業について講義を受け､実習生でチームを組んで授業を作り､カーディフ大学の生徒に実際に授業を行いました。実習生は個性の強い人ばかりで、意見を正面からぶつけ合うこともありましたが、それもとても良い経験になりました。また、実習先のカーディフ大学の生徒はとても親切で、同年代の人がほとんどだったこともあり、すぐに仲良くなることができました。日本語と英語の混ざった会話でしたが、英語の勉強になると同時に、普段話している日本語についても考える良い機会となりました。

毎日が忙しく、大学生相手に日本語の授業をするという難しい実習でしたが、色々なことを経験し、学ぶことができました。日本語教育に興味がある人は、機会があればぜひ参加して、経験してみてほしいと思います。

お別れパーティー

2部　英米文化学科　3年　**藤井　太郎**

2013年2月から3月にかけて、ウェールズのカーディフ大学にて行われた日本語教育実習プログラムに参加しました。期間は1カ月で、研修の内容はTBL（Task-Based Learning）による第2言語教育についての講義を受け、その考えに基づいた授業見学をし、実際に教案を作成し、日本語を学んでいるカーディフ大学・日本研究センターの2年生を対象に教育実習を行うというものです。学生の皆さんはTBLに基づく日本語教育を既に受けており日本語運用能力が高く、また積極的にタスクに参加してくれたこともあって非常に充実した実習となりました。

学生の皆さんを含めカーディフの人々は非常に紳士的で、拙い英語による質問に対してもわかりやすい回答をしてくれました。また市内は大変治安がよく、街中を歩いていて不安を感じたことはありませんでした。その他に市内および近郊には魅力的な場所が多く存在し、市内中心部にあるカーディフ城をはじめ、近郊のセント・ファガンズ国立歴史博物館やカランダフ大聖堂、キャッスルコッホやケアフィリー城など、日本と異なる建築様式で美しく興味深い場所ばかりでした。

ステイ先はCELTが選定をするため（日本人的な感覚からすると）当たり外れがあり、実際にステイ先を変えてもらう事となったのですが、相談をしてからの対応は実に迅速で満足のいくものでした。このように、今回が初めての海外経験でしたが、とても貴重かつ有意義な経験をすることができました。これを今後の学習に生かすつもりです。

カーディフ市中心街

1部　英米文化学科　3年　**松原　華子**

この研修は春季休暇を利用して2月から3月にかけて4週間task-based language teachingを用いた日本語教授法を学び、最終週には実際にカーディフ大学の学生に日本語を教えるというものでした。加えて、日本語教授の学習をしながら、2週間語学学校に通って英語も学ぶという非常に濃い内容でした。今回が初めての海外だった私にとって出発前は不安な面もありました。しかし、このプログラムを通じて熱心に日本語学習に取り組む学生の姿や、彼らを支える先生方の姿、また実際に日本語を教えることで日本語教育や日本語教師という職業や言語そのものに関する関心が高まったということは言うまでもありませんが、同時に、異なる文化やそれを持つ人々にも興味をもちました。具体的には、日本国内にいる間は目の色も肌の色も自分と同じような人ばかり見かけますが、カーディフでは異なる目や肌の色を持つ人たちが生活をしており、大学で学んでいるということに驚きました。また、観光客のような人が私に道を聞いてくるということもあり、日本ではなかなか無いことだと感じました。日本語教育に携わるためには、教授するための知識を養うということはもちろんですが、それと同様に学習者の文化や考えを知ることや自分自身のことを知ることも重要なことだと感じたので、期間としてはそれほど長くはありませんでしたが、このような面も体験することができて良かったと思っています。

ゼミ室紹介

1部　日本文化学科
菅ゼミ

ゼミ指導教員から……

言語系ゼミが３つある中の一つとして、このゼミでは主に現代日本語を対象にして、その構造や運用について学んでいます。いわゆる正しい日本語という考え方を否定し、誤用にもそれなりの合理性があるという前提で、さまざまな日本語表現を考えていきます。そのため、正しく美しい日本語を身につけようとする学生さんは、戸惑うことがあるようです。また、共通語（標準語）だけでなく、各地の方言もその対象となります。ゼミでの学習を通して、日本語の多様性を知り、その日本語を使っている日本人のありようを学んでほしいと願っています。　（菅　泰雄）

学生から……

佐藤晃平

夜のスポーツニュース、ラーメン特集の雑誌、平積みで並ぶ本の帯。よく行くお店の看板や、友達と交わす挨拶。地球の裏側で使われている外国語も、さっぱり使えない手話も、無意識に行うボディランゲージも。私達の住む世界のいたるところで「言語」が使われています。「言語学」をテーマに卒業論文なんて書けない……。そう難しく考えるのはやめましょう。あなたの好きなことを思い浮かべ、そこに言葉や文字がどう使われているのか、なぜ使われているのか、或いはなぜ使われていないのか。あなたの「好き」と「なぜ？」があれば論文はできます。困った時は菅先生がなんとかしてくれます。先生、あとは宜しくお願い致します。では。

梅木伊緒理

このゼミの主な活動内容は、語彙や文法、表現方法など、様々な角度から現代日本語について分析し、その特徴について考察するというものです。私は、このゼミで日本語について多くのことを学ぶことで、現在我々が使用している日本語は、長い年月をかけて変化してきた末に形成されたものであるということを強く実感しました。そして、そのことを理解すると、しばしば世間で騒がれている言葉の誤用も、言語変化の大きな流れの中の一つにすぎないと考えるようになりました。このゼミで言語について研究をしていれば、私のように新たな視点を獲得できるかもしれません。言語について考えてみたいと思っている人は検討してみるといいと思います。

和田佑太

菅ゼミでは、私たちが使っている日本語という言語が持つ特性について、テキストに基づき順番にレジュメにまとめて発表し、議論するという形式をとっています。そうした活動をすることで得られた知識や気づきは、普段の言語活動を整えてくれます。

私たちは言葉によって世界を理解し、言葉によって思考し、言葉によって他者と交流を持ちます。言語活動が整えられるという事は、私たちの世界のとらえ方や、思考や、他者との関わり方などが整えられるという事なのです。

学習して終わりにならない言語の世界は刺激的で実用的であり、菅ゼミとはその世界を体験できるゼミだと言えると思います。

村上麻衣子

このゼミは、日本語の語彙に関する問題を取り上げた教科書に沿って、日本語の在り方や遣われ方について考察するゼミです。基本の知識を共有するだけではなく、自分の体験や経験を基に教科書にはない新たな日本語の常識を議論の中で作り出すことも可能です。普段私たちが遣っている日本語を改めて見直すことでより深く知ることが出来ると同時に、現代ならではの日本語、そして今後の日本語についても新たな発見が出来る場でもあります。

小原聡美

菅ゼミは、日本文化の中で言語の分野について学んでいます。私たちは普段何気なく日本語を使って言葉を発していますが、言語学の視点から見ると不思議なことがたくさんあります！　例えば、机の四方をこちらから見ると机の「すみ」であちらから見ると机の「かど」となることなど､毎回のテーマに沿ってみんなで考えていきます。敬語・方言・外来語など様々な内容を学ぶことが出来るので、充実したあっという間の 90 分です。菅先生の人柄の良さもゼミの魅力のひとつです (*^_^*)

中野亜紀子

このゼミでは、菅先生のもとで日本の言語について学んでいます。毎回方言や、男女や年齢による言葉の差、また敬語表現など、様々なことをゼミの中で発表し、議論をしています。発表のテーマは、教科書の内容に沿って各自順番に担当していくので、テーマについて自分で参考文献などを調べながら、質問に答えられるよう予習をし、それぞれ発表に臨んでいます。

菅ゼミは様々な視点から日本語について学ぶことができ、日本語というものをより深く知ることが出来るゼミです。

卒業生通信

初心忘れず

韓国韓南大学校　日語日文学科専任講師　**若狭　知里**
（日本文化学科　2006 年卒業　中川かず子ゼミ）

日本語教師となり５年目となりました。現在、韓国の大田市にある韓南大学校で日本語教師をしています。まだまだ、教師として一人間として知らなくてはならないことがたくさんあり、反省と勉強の日々ですが、明るい学生達に囲まれ楽しく過ごしています。

私が所属している韓南大学校にある日語日文学科は、1973 年に開設されました。日語日文学科という学科の設置時期は、韓国内でも早い方であり、大田市の中では最初に設置された歴史と伝統のある学科であると言えます。現在、日語日文学科には、４学年合わせ約 160 人が在籍しています。

現在、私は１年生から３年生までの会話、聴解、文法、そして他学科の日本語教養科目を担当しています。学年、学科によってレベルはもちろん、カラーも異なり、試行錯誤しながらやっていますが、様々な科目を担当できることは良い経験だと思っています。３年生の会話の授業には、日本人の交換留学生もおり、同世代の日本人との交流は、学生一人一人にとってもよい刺激になり、クラスにも活気が出ます。

私は、高校生の時から日本語教師になりたく、それだけを見据えて準備して来ました。実際にやってみて、理想と現実との差に悩むことはありますが、この仕事に就いて良かったと思うことは数え切れないほどあります。学生達の考えや将来に耳を傾ける中で、自分自身について日本語を使って話す姿、日に日に上達していくことが手にとるようにわかることは大きな喜びであり、私がこの仕事をしていく上での原動力になっています。

１年生の学生達

韓国では、毎年５月 15 日は先生の日（스승의 날）です。先生を敬い、日頃の感謝の気持ちを伝える日であり、学生達が素敵な催しを開いてくれます。毎年、気持ちのこもった手紙をもらいます。それが非常に嬉しく、励みとなっています。多くの学生が日本語で夢を実現しようと頑張っています。夢ある学生の助けになれること、そして成長を見守れることは幸せなことです。また、異国で暮らし、その国を肌で感じられることも仕事をする上での楽しみですが、それと同時に自国を見直すこともでき、日本人であることに改めて誇りを持つようにもなりました。何のために仕事をするのか……「世のため、人のためであり、教師と言う職業は人として生まれ、人として生き、人に生かされ、人を生かし、人のために生きるという要素が強い。」と高校時代の恩師が話してくれました。この言葉を心に刻み、初心を忘れず、これからも自己研鑽を積み、多くの人との出会いと交流を楽しみながら、仕事をしていきたいと思います。

５月 15 日先生の日に学生達と

手紙とプレゼントをもらいました

大 学 院 の 窓

大学院は「なるほど」がいっぱい

文学研究科　修士課程１年　**小川ゆう紀**

漠然とした物足りなさを感じ始めていた2008年の夏、私は専門学校を卒業後サービス業に従事していました。日々感じる丁寧語の奥深さや、目の前を行き交うお客さんたちを見ていると私には何かが足りないなという考えが芽生えてきました。高校では教科書の内容を詰め込むだけの試験勉強を、専門学校では国家試験に合格するための勉強をしていました。それらの勉強は決して無駄になってはいませんが、「世界にはもっと私が知らないことがあるだろう、知識の海へ飛び込もう」と一念発起し、脱サラし、大学生になりました。大学受験時の志望動機にはもっともらしいことを書きました（決してうそは書いていません）が、簡潔にいうと、こんなところです。

学部生のときは学生の特権を大いに活用しました。学生のときにしか出来ないことをたくさん（サークル活動以外のことを）したのです。長期休暇の時にはあちこち旅行をし、交換留学もしました。留学は学生のときしか出来ないビッグイベントです。正直にいうと、入学する前から在学中にどこかへ留学しようと計画をしていました。そんな夢がかなった留学中の経験を少し書きます。

私が留学したのは韓国の大田大学校です。大田広域市は韓国の中心に位置し、札幌市と姉妹都市の関係にあり、わが札幌と同じ規模の大きな町です。韓国語は２年生のときに始めたので２年間の勉強（初級レベルが終わった程度）で約１年間の留学に挑んだわけです。留学当初の私の韓国語は聞くにも見るにも堪えないようなものでしたが、持ち前の適応力で留学生活を有意義に過ごしました。日本と韓国の文化や価値観の違いは様々なところで目の当たりにしました。留学の経験談などでよくありますが、私はカルチャーショックを感じることはなく、韓国での異文化体験は私にとっては受け入れ可能なものでした。卒業論文のテーマが非言語行動の日韓比較だったので、留学中は韓国人の非言語行動を注意深く観察していました。学校で、レストランで……日常生活の全てが「なるほど」で溢れていました。例えば､学生が先生に怒られる場面。先生はひとりの学生に向かって説教をしています。そして当の怒られている学生は直立不動の姿勢で先生の目をじっと見据えています。もちろん一言も発しません。このように、日本と韓国では誠意の見せ方が異なるのです。そんな数多の「なるほど」を頭に詰め込んで帰国した私は、大学院への進学を決意します。

韓国の若い兵隊さんたちと

大学院での研究テーマは非言語行動の比較ではありませんが、これまでに培った知識、留学中の経験、大学院の先生方のご指導とご助言を頂戴しながら研究を少しずつ進めています。大学院の授業でも「なるほど」がたくさんあり、驚きの毎日です。図書館へ行くことが多くなりますが、図書館へ行くたびに私の知らないことの多さに驚きます。所蔵図書のうちの何冊を読んだのでしょう。円周率より低いことは確かです。

学会・研究発表

大石　和久
「ベルクソニスムと漫画における運動表象――『仮面ライダー』（石ノ森章太郎、1971 年）を具体例として――」、2012 年 12 月 1 日、日本映画学会第 8 回全国大会、大阪大学

常見　信代
「ケルト教会論の系譜」、1 月、中世ブリテン史研究会、城崎玄武

手塚　　薫
「千島列島の考古学――鳥居の研究成果をどのように活用すべきか――」、2 月、国立民族学博物館共同研究会、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

テレングト・アイトル
「東洋における修辞学の変遷――日中修辞学の比較を兼ねて」、1 月 26 日、21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正：準備会第 3 回研究会、国際日本文化研究センター
「グローバル化・合理化した世界における人文学――文学の役割とは何か――」、5 月 18 日、『人文学の新しい可能性』北海学園大学人文学部開設 20 周年記念シンポジウム、北海学園大学

濱(浜)　忠雄
「アメリカの対ハイチ政策における『帝国意識』」3 月 23 日、帝国史研究会、武蔵大学

本城　誠二
「聖なる野生と繰り返す越境――コーマック・マッカーシーの『越境』をめぐって――」、4 月、日本アメリカ文学会北海道支部研究談話会、札幌市立大学サテライト・キャンパス

安酸　敏眞
「ニーバー再考――その歴史理解を中心に――」、2 月 18 日、第 6 回「ラインホールド・ニーバー」研究会（科学研究費補助金「ラインホールド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」）、学校法人聖学院本部

著書

上杉　　忍
『アメリカ黒人の歴史――奴隷貿易からオバマ大統領まで』（単著）、3 月 25 日、中公新書、236 + iv 頁

追塩　千尋
『新厚岸町史』通史編第一巻　第 3 編第 2 章（450-480 頁）、同第 3 章（481-504 頁）、同第 8 章第 3 節（732-749 頁）、2012 年 11 月、ぎょうせい

寺田　吉孝
『ОБО ВСЁМ ПО-НЕМНОГУ（1）』（共著）、3 月、SI 企画
『ОБО ВСЁМ ПО-НЕМНОГУ（2）』（共著）、3 月、SI 企画
『ДАВАЙТЕ ОБЩАТЬСЯ ПО-РУССКИ――ЭЛЕМЕНТАРНЫЙ УРОВЕНЬ――』（共著）、3 月、SI 企画
『ドイツ、フランス、中国、ロシア、韓国・朝鮮とその周辺地域の言語と文化（改訂版）』（共著）、4 月、共同文化社
『РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ НАЧИНАЮЩИХ（4 訂版）』4 月、SI 企画

論文

上杉　　忍
「アメリカにおける『優生政策』の歴史的脈絡」、3 月、『生命の倫理 3――優生政策の系譜』、山本喜代子編、九州大学出版会、3-21 頁

上野　誠治
「翻訳と解説　形態論：語構造の分析（2）」、3 月、『人文論集』第 54 号、北海学園大学人文学部、27-60 頁

大石　和久
「現代日本映画とコンテンツ」、2012 年 6 月 25 日、『学園論集』第 152 号、北海学園大学学術研究会、265-276 頁

佐藤　貴史
「正統派か無神論か？――レオ・シュトラウスの『哲学と法』――」、2 月、『政治哲学』第 14 号、政治哲学研究会、64-86 頁
「レオ・ベックにおけるユダヤ教とキリスト教――共通コンテクストとしての歴史主義の問題をめぐって――」、3 月、『ユダヤ教とキリスト教』、日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録第 2 号、日本基督教学会北海道支部、1-19 頁

柴田　　崇
「昇降時における階段の " 陰 " と " 影 " の生態学的意味」、4 月、『生態心理学研究』第 6 号、59-64 頁

須田　一弘
「移動から定住へ：パプアニューギニア山麓部の事例から」、4 月、印東道子編『人類の移動誌』、臨川書店、246-257 頁

手塚　　薫
「千島列島への移住と適応」、3 月、「環境変化と先住民の生業文化――海洋生態系における適応――」（第 27 回北方民族文化シンポジウム）、北海道立北方民族博物館編集、財団法人北方文化振興協会発行、19-24 頁

寺田　吉孝
「ロシアの地名について（2）――ヴラヂーミル州の河川名の起源――」、3 月、『開発論集』第 91 号、北海学園大学開発研究所
「О названиях рек во Владимирской области」、5 月、『Лексикография. Язык. Речь. Сборник статей памяти Анны Липовской』、ソフィア大学出版局、ソフィア

テレングト・アイトル
「東洋における修辞学の変遷――日中の修辞学の比較を兼ねて――」、3 月、『人文論集』第 54 号、北海学園大学人文学部、61-82 頁

中川かず子
「大学と地域を結ぶ日本語教員養成」、6 月、『大養協論集第 8 号』、大学日本語教員養成課程研究協議会、20-26 頁

濱(浜)　忠雄
「ジロデ＝トリオゾンの作品における身体表象――レイシズム、ネイション、ジェンダー」、3 月、『学園論集』155 号、北海学園大学学術研究会、1-30 頁

本城　誠二
「ポストモダン小説を考える――乱反射するテクスト『重力の虹』――」、3 月、『北海道アメリカ文学』第 29 号、日本アメリカ文学会北海道支部、6 頁

村中　亮夫
「住民参加型安全安心マップ作成のワークショップが環境介入に与える影響――マップに記載された情報に着目して――」（村中亮夫・谷端郷・米島万有子・湯浅弘樹・瀬戸寿一・中谷友樹による共著）、5 月、『地理科学』第 68 巻 2 号、地理科学学会、114-131 頁

安酸　敏眞
「ブルトマン再考――実存的《歴史性》の概念の再検討」、12 月、『基督教学研究』第 32 号、京都大学基督教学会、33-56 頁

講演

大石　和久
北の映像ミュージアム 2012 年後期第 5 回「北のシネマ塾」『大草原の渡り鳥』解説、2012 年 11 月 17 日、北の映像ミュージアム

田中　　綾
「現代短歌の世界」、1 月 25 日、SAPPORO ART LABO（札幌）
「書棚から歌を――若者たちに伝えたい短歌」、5 月 15 日、北見市民大学講座（北見）

本城　誠二
「戦後の日本映画について」、6 月、創造学園豊平塾、札幌市月寒公民館

評論・エッセイ

上杉　　忍
評論「アメリカ史の名著 3 点」、『歴史評論』5 月号（第 757 号）、66-71 頁

大石　和久
「私が好きな、この一本、一冊、一枚」（『大草原の渡り鳥』紹介）、2012 年 11 月 15 日、『O.tone』、あるた出版

佐藤　貴史
「パネンベルクの学問論――*Theologie und Wissenschaftstheorie* の翻訳に関するノート――」、3 月、『Credo Ut Intelligam』Vol.3、研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」研究報告論集、青山学院大学総合研究所、109-117 頁

田中　　綾
（書評）阿木津英著『方代を読む』（現代短歌社）、『図書新聞』2 月 16 日
（書評）山田航歌集『さよならバグ·チルドレン』（ふらんす堂）、『詩の練習』6 号（3 月）
（書評）澤地久枝著『愛の永遠を信じたく候』（七つ森書館）、『北海道新聞』4 月 14 日
（評論）「現代歌枕　北海道・石狩湾」、『短歌研究』2 月号、短歌研究社
（評論）「私的福島泰樹論」、『短歌往来』4 月号、ながらみ書房

（評論）「追悼　梶木剛」、『短歌研究』４月号、短歌研究社
（評論）「今、『散文精神』を思う」、『北大短歌』創刊号（４月）、北大短歌会
（評論）「セーフティネットとしての短歌」、『現代短歌新聞』５月号、現代短歌社
（解説）「解説」『大野道夫歌集』砂子屋書房（４月）
（エッセイ）「寺山修司とわたし」、『短歌研究』６月号、短歌研究社
（選評）「第 14 回三浦綾子作文賞」、１月、同賞入選作品集、三浦綾子記念文学館
（作品）「労働歌」５首、『現代短歌新聞』３月号、現代短歌社
（作品）「月曜の朝」12 首、『北大短歌』創刊号（４月）、北大短歌会
（コラム）「書棚から歌を」、『北海道新聞』、１月６日◇１月 13 日◇１月 20 日◇１月 27 日◇２月３日◇２月 10 日◇２月 17 日◇２月 24 日◇３月３日◇３月 10 日◇３月 17 日◇３月 24 日◇３月 31 日◇４月７日◇４月 14 日◇４月 21 日◇４月 28 日◇５月５日◇５月 12 日◇５月 19 日◇５月 26 日◇６月２日◇６月９日◇６月 16 日◇６月 23 日

手塚　　薫
（書評）「岸上伸啓編著『捕鯨の文化人類学』」、３月、『北海道民族学』第９号、北海道民族学会、68-70 頁

安酸　敏眞
「ボルゲーゼ美術館におけるベルニーニ体験」、３月、『平成 24 年度　ヨーロッパ研修旅行報告書』（ヨーロッパ研究会）、56-58 頁

翻訳

寺田　吉孝
「M. M. ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（12）」（共訳）、３月、『学園論集』第 155 号、北海学園大学学術研究会
「M. M. ドブロトゥヴォルスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（13）」（共訳）、６月、『学園論集』第 156 号、北海学園大学学術研究会

研究費

佐藤　貴史
青山学院大学総合研究所 2013 年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）
平成 25 年度北海学園学術研究助成・一般研究「20 世紀ドイツ・ユダヤ思想史の再検討」（研究代表者）
平成 25 年度北海学園学術研究助成・総合研究（代表：安酸敏眞）「人文学の新しい可能性」（研究分担者）

柴田　　崇
科学研究費補助金（基盤研究 C；平成 25 ～ 27 年度）「サイボーグ思想の『原型』――1920 年代のイギリス科学思想界の分析」（研究代表者）

安酸　敏眞
平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（一般）（研究代表者安酸敏眞）「《ベルリン精神》の内的相剋としてのシュライアーマッハーとヘーゲルについての研究」
平成 24-25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（一般）（研究代表者高橋義文）「ラインホールド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（研究分担者）
平成 25 年度北海学園学術研究助成（総合研究）「人文学の新しい可能性」（研究代表者）

その他

大石　和久
「万華鏡のようにイマジネーションを喚起する北の大地」（インタビュー）、５月１日、『ラポラ』、AIR DO 機内誌

田中　　綾
（鼎談）及川恒平、山田航と「山田航歌集『さよならバグ・チルドレン』をめぐる変奏展」、３月 23 日、テンポラリースペース（札幌）
（司会）学園大 OB 異業種ネットワーク　パネルディスカッション「学園女子力」、６月 22 日、東京ドームホテル（札幌）

中川かず子
韓国ソウル市、大田市調査旅行（開発研究所日韓共同研究の一環として）、３月 13 日～ 17 日
レスブリッジ大学短期日本語コース講師（６月５日、10 日、17 日）
北榆杯（全国選抜学生競技ダンス大会）大会会長、５月 12 日、北海道大学第二体育館

〈日本文化学科〉

・指導教員　菅　泰雄

入　江　一　平：人の心を捉えるキャッチコピーについて
遠　藤　拓　哉：自動翻訳でみる日本語と中国語―日本語の助辞「タ」と中国語の助詞 " 了 " から―
大　平　真　実：「若者のぼかし表現」と自己防衛
鎌　田　　芽：皮肉表現について―嫌み、世辞、からかいの観点から見た皮肉―
菊　地　修　平：現代日本語における敬称の使用感
庄　司　清　志：異なった方言を持った両親の子どもが獲得する言葉
先　崎　　涼：言葉が流行するまでの過程について―流行語の共通点とその傾向―
髙　木　禎　恭：正しく使わないと顰珍漢な慣用句
田　中　英　行：北海道海岸方言の変遷
寺　田　彩　香：声に出して読めない名前―DQN ネーム・キラキラネームを考察する―
中　村　周　平：依頼表現における婉曲表現について―配慮との関わり―
中　山　明　瑛：現代における敬語の乱れ―3 タイプの誤りから考える現代敬語―
成　兼　花　穂：丁寧な表現の疑問文における文末助詞「か」の省略と、疑問以外の意味を持つ疑問表現について
橋　本　隆　弘：女性語とは何を示すのか―現実とフィクションにおける女性語の持つ意味―
葛　西　美　稀：せたな町北桧山区新成における方言
竹　川　恵一郎：日本語の文の構成、文章の構成について
藤　原　衣　美：日本と外国のことわざの比較

・指導教員　徳永良次

安　達　沙　姫：坂口安吾『堕落論』の考察―破壊と希望―
池　田　美　里：日本語の「曖昧」表現の現状とその地域差
岩　本　直　樹：内田百閒と森見登美彦の比較―『四畳半神話大系』に見る、『阿房列車』の影響―
齊　藤　莉　汰：日本語の男女差―「女／男ことば」で考える言葉の乱れ―
東海林　しおり：『源氏物語』の民間信仰からみる紫式部の知識―「ささがに」の説話を中心として―
山　田　由　香：言語学的観点からみる言文一致―口語と文語―
三　上　雄太郎：日本の職人気質
緑　川　宗　壱：小説『主人公の友たち』
櫻　井　　敦：ライトノベル論―定義と歴史・これから―
林　　雄　亮：北海道はいつから日本か

・指導教員　中川かず子

安　宅　拓　朗：ネットコトバとコミュニケーション
稲　垣　恵　美：地域の日本語ボランティア教室が果たせる役割を考える
井　上　直　人：オノマトペから見る宮沢賢治の世界観
川　口　絢　未：外国籍児童の教育を支える地域コミュニティーの取り組み
久　保　拓　也：日本語の助数詞の読みの考察―ハ行助数詞を中心に―
熊　谷　佳　祐：多文化共生を目指す社会―外国人居住者の課題と展望―
五　味　茄奈子：対人行動における日韓比較―断わり表現を中心に―
竹　内　あかね：武士道からみる日本人らしさについて
竜　野　征一郎：受身文の日英比較―村上春樹作品から―
千　葉　幸　恵：色彩から見る日本人らしさ
花　岡　成　美：昔話から見る日本人の価値観―異類婚姻譚を中心に―
増　谷　　萌：ホフステード理論から見る若者意識、価値観の国際比較―何を幸福と感じるか―
松　井　城　聖：不登校の予防策に関する考察
嶋　田　　剛：学生と社会人のコミュニケーション観の違い
小　川　ゆう紀：テレビ番組の対談場面におけるあいづちの日韓比較
田　口　明　奈：言葉から見た動物の概念の日英比較―諺、慣用句などに使用されている動物の印象の比較―
山　森　未　央：J.K. ローリング著『ハリーポッターと賢者の石』からみるオノマトペ日英語比較
近　藤　陽　彦：日本語の乱れに関する一考察―「国語に関する世論調査」を中心に―
玉　木　　暖：インターネット通販におけるユーザーレビューの有効活用法について

・指導教員　大石和久

藤　井　涼　太：映画スターとしてのブルース・リー研究
森　實　功　介：アメリカ映画の中の「日本」―アメリカの目がどう日本を捉えたか―
阿　部　允　樹：映画『レッドクリフ』における三国志
石　丸　　栞：ループもの作品の魅力について
今　井　大　亮：ディズニーがもたらした魔法―シンデレラ・白雪姫より―
片　岡　大　也：映画から見る家族の変遷
上小倉　康　之：怖い映画のヒミツ―ホラー映画の魅力とは―
小　林　真　之：セカイ系の構造分析と問題点
小　松　しおり：宮崎駿監督作品の世界
菅　井　健　悟：日本における特撮の技術の変異と魅力
高　橋　周　平：スティーブン・スピルバーグ大研究―世界一のヒットメーカー―
田名部　　碧：荻上直子監督の作品の魅力について
玉　手　可奈美：日本における映画字幕翻訳の現状と未来―字幕翻訳家の苦悩と努力―
千　葉　夏　未：伊坂幸太郎と中村義洋監督が織りなす作品たち―そこから見る小説の映画化―
津　川　真　大：ロボットに心をみる仕組み―映画にみえる人とロボットの心のあり方―
本　間　紗　貴：ジェンダーの視点から見るディズニープリンセス作品

柳　川　英　史：攻殻機動隊に見る押井守の魅力
柳　町　　翼：クリストファー・ノーランが描くバットマンの世界
山　本　佳　奈：『ぼのぼの』という作品の魅力
佐々木　智　美：アニメに現れる日本文化とその役割―「交流」「食」からみる地域性―
瀬　戸　隆　広：アニメーション監督　細田守　細田作品から見る今後のアニメーションの展望
伊　井　和　雅：アニメーションにおけるモデルとしての聖地―なぜ聖地と呼ばれるのか―
植　木　文　佳：映画音楽の歴史―シンフォニック・スコアの衰退と再興
佐々木　舞　子：映画『ハリー・ポッター』の世界
田　口　　凌：『2001 年宇宙の旅』におけるキューブリックの狙い
中　山　哲　郎：押井守の照れ隠し
増　田　大　夢：近現代映画作品からみるファッション文化
米　谷　孔　佑：中島哲也が制作する映画とは

・指導教員　須田一弘

上　村　浩　城：現代日本における「障碍者」を取り巻く社会と個人の葛藤、そして未来
内　澤　侑　里：ディズニーランドの人気の秘密―国民性とホスピタリティー
柿　本　紗絵子：ピアノのイメージ
亀　谷　美　幸：ゲテモノはなぜ気持ち悪いと感じるのか
木　田　悠　太：人が山に登る理由
小　島　聖　子：日本のクリスマス―仏教国・日本でクリスマスはなぜ受け入れられたのか―
杉　澤　玲　奈：現代における手紙の役割
杉　野　香　織：筆跡は鏡
杉　林　香穂里：狼
鈴　木　かすみ：酪農という営み
髙　松　佳　菜：日本で愛される『赤毛のアン』
中　川　　大：ボランティアの根源と行方
中　田　夕　貴：和菓子と人との関わり
牧　野　華　子：味噌の出来るまで
脇　本　千　尋：『北斎漫画』とその影響
池　田　　聖：英雄と長寿を生んだ「桃」
加　納　健　太：狐のイメージについて
高　橋　輝　圭：タイヤ人形と道祖神
竹之内　優　美：現代の死生観と葬送儀礼の意味

・指導教員　郡司　淳

阿　部　さやか：「いじめ」てはいけない理由
奥　村　奈央子：核兵器廃絶のために―“唯一の被爆国”認識の形成と展開―
菊　池　彩　香：原田左之助にみる幕末の志士像
相　良　佳　孝：特攻とは何か―特攻を強いた者／行った者―
花　岡　　恵：秋山好古とその時代
村　上　由　紀：へき地を活かした教育を目指して―日高町の現状と課題―
奥　田　理　恵：“究極の正義”とは―やなせたかし「アンパンマン」の問いかけ―

・指導教員　小野寺静子

赤　間　郁　子：万葉集巻七挽歌について
伊　藤　鈴　佳：防人歌
谷　尻　まひろ：春愁三首についての考察
田　村　優　維：万葉集における夢
室　谷　汐　美：朝明川―あさけがわ―
開　米　房　代：言霊の歌
佐　藤　洋　子：紫式部の『源氏物語』創作エネルギーを探る

・指導教員　田中　綾

荒　水　悠　太：「ポエムアイ」―最も詩人らしからぬ詩人の目―
今　井　智　瑛：野島伸司が作り出すいじめの構造―社会派ドラマの意義とは―
岡　田　茉　林：十二国記シリーズ試論
影　浦　寛　之：無限回廊（小説）
佐　藤　奈　鶴：美しき誤算―歌集『意志表示』と或る大学生の青春―
清　水　敏　弘：《有栖川有栖》という鏡を通してみた江神二郎と火村英夫―有栖川作品で描かれる人物たちと作品世界に与える影響についての考察―
珍　田　みな美：三島由紀夫が描く猫―『午後の曳航』における“猫殺し”の背景―
中　村　浩　希：消された文学―昭和戦時下における発禁図書の研究―
塙　　結莉香：長野まゆみの世界とは
益　子　竜　平：Q & A―戸張音々の真相心裏―（小説）
山　下　卓　朗：IGNORANCE（小説）
吉　村　雅　彦：何処へ行く（小説）
大　原　愛　友：エッセンス（小説）
尾　崎　君　子：明日のマリ（小説）
角　道　美　弥：くまのさくじろう（小説）
木　村　圭　吾：理想（小説）
田　村　彩　織：オーヴ（小説）
長　岡　真　司：詩と詞の相利共生
阿　部　愛　美：春夏秋冬（小説）
工　藤　寛　彰：山と思い出とわたし（小説）
山　際　達　弥：短編『秋桜』ほか―様々な誤解と思い込みの話―（小説）

・指導教員　追塩千尋

荒　関　友　輔：平安時代における不動信仰の流布
伊　藤　　柊：日本人の「境界」イメージの確立―『今昔物語集』に見る境界―
兼　子　舞　子：熊野信仰の成立と発展―為政者と民衆の心をつかんだ熊野詣と紀伊の国・熊野―
後　藤　久美子：頼朝政権下の鎌倉武士の実態
酒　井　悠　司：行基の思想と社会実践の研究
寺　尾　　瞳：日本神話とギリシア神話の類似についての比較研究
宮　本　瑶　子：貞観御霊会の意義―藤原氏との関係から見た怨霊の特色―
平　賀　友　美：古代日本人と狐―古代説話を通じて見る異類間の関わり―

・指導教員　船岡　誠

伊　藤　未　来：夢窓疎石の庭園

角　田　宏　文：義経の最期―合戦や頼朝との確執を通して―
菊　地　由　貴：新選組の武士道
佐　藤　裕　樹：前田利家の性格・行動
高　橋　里　奈：柳田国男の柳田学と日本古来の宗教
中　川　慶　彦：名君　上杉鷹山
西　村　大　地：戦国時代の『男の意気地』とは
蜂　谷　航　平：三河の領国支配―今川氏と徳川氏―
平　井　　謙：武道初心集から見る元禄武士像
藤　宮　　渉：安藤昌益―「狂人」と呼ばれた男の正体―
三　浦　啓　輔：木曽義仲の人物像と功績について
村　上　藍　子：一向俊聖の思想と行歴
青　山　瑞　紀：日本仏教の民衆化と葬式仏教化
吉　村　絵美子：二代目団十郎と不動信仰―演劇とは何か？―
大　高　美　咲：キリスト教と日本の宗教
中　川　亜香音：土方歳三の生きた道

〈英米文化学科〉

・指導教員　井上真蔵

相　坂　勇　磨：工藤夕貴―どのようにしてハリウッド女優になったのか―
稲　邊　満厘江：文化を超えるディズニーのホスピタリティ―アメリカ、日本、そしてディズニーの文化―
梅佐古　梨　奈：スターバックス５つの法則―その独自の企業文化―
尾　形　美　沙：異なる文化圏から見た日本
倉　光　千　里：ダニエル・カールと日本―異文化接触の視点より―
斎　木　美　里：異文化を越えたサービスとホスピタリティ―帝国ホテルとザ・リッツカールトンホテル―
富　田　　匠：伏見中学校カナダ訪問団―異文化体験から考える―
芳　賀　敦　浩：恵庭市とティマル市の姉妹都市交流―国際交流派遣事業が学生にもたらす影響とは―
神　原　静　海：村上隆に学ぶ異文化交流法

・指導教員　岩崎まさみ

阿　部　早友美：東日本大震災と家族・ライフスタイル
伊　藤　和　美：死を看取り続ける看護師とそのケアについての考察
小　田　桃　子：震災後の子どものこころのケア
小野寺　裕　太：災害とボランティア
木　村　宵　子：東日本大震災で見えた日本人の性質
熊　谷　　諒：買い物難民と無縁社会
小　林　千陽美：様々な視点からみる東日本大震災とニュージーランド地震
綱　島　花　波：東日本大震災におけるボランティアの功罪
松　井　啓　介：震災と漁業―水産業復興特区と宮城県漁業―

・指導教員　上杉　忍

加　藤　愛　実：ジョブズ・ドリーム―アップル復帰後のジョブズ―
近　藤　迪　子：20 世紀前半、アメリカ南部社会の実態～その時代に生きた５人の黒人の自叙伝から子供時代を中心に～
近　野　佑　太：アメリカにおける日系人の移民と強制収容
土　屋　香　織：黒人農民ネイト・ショウ自立への道
本　間　量　子：アメリカ合衆国における「異人種間結婚禁止法」
山　内　優貴子：民間軍事という新しいビジネス―冷戦終結後の業界の盛り上がりと問題点
吉　田　江　里：原爆開発・投下をめぐる真相とアメリカ世論の形成
岸　田　恭　太：ジャズの「帝王」マイルス・デイヴィス
石　橋　美　希：日系アメリカ人強制収容が現代に語りかけるもの
中　村　和　乃：アメリカン・インディアンの真実―イギリス植民者と先住民の最初の出会い―

・指導教員　上野誠治

大　山　ちなみ：カタカナ英語と英語の違い
佐々木　美　幸：形容詞の後置における分類
杉　本　紗　紀：冠詞の選択について
武　田　恵里佳：英語における敬語的表現
成　田　奈　穂：関係詞の種類と用法
三ッ浦　寿　野：時を表す前置詞について
網　干　竜　二：欧米のジョークからみた文化の違い
堺　　達　也：教科書分析から見る英語教育
佐　藤　昌　貴：日本語と英語のスラング

・指導教員　川上武志

五十地　　聡：*The Body* ～ホラーの帝王が書いた「ふつう」の小説～
賀　古　みずき：シャーロック・ホームズ～その性格から見る観察眼～
九　々　千　明：E. E. Cummings ～彼の詩に隠された暗号～
國　分　春　菜：クリスマス・キャロル～チャールズ・ディケンズが伝えたかったこと～
田　部　真奈美：*Never Let Me Go* ～決められた運命を生きるヒト～
前　田　夏菜子：Ronald Dahl: *Charlie and the Chocolate Factory* ～親が子供に与える影響～

・指導教員　佐藤貴史

岩　本　和　也：マルティン・ハイデガーによる存在の探求～現存在の分析から考察される時間性について～
野　尻　　静：ヨブ記における神とサタン
松　田　　樹：万教の元一つ～ジョン・ヒックの宗教多元主義による世界平和の探求～
横　山　　惇：カリスマ
帰　山　絢　子：なぜ人は宗教に入るのかカルト宗教における日本と海外での比較
田　井　愛　華：エイブラハム・リンカーン～父と呼ばれた理由～
真　野　　修：ヨーロッパの魔女狩り

・指導教員　柴田　崇

安　藤　夕　香：資生堂の広告戦略
菊　地　智　美：マイケル・サンデルの思想に基づくウィキリークスの正義
越　中　奈　々：日本人の音楽との関わり方の変化から見えること
佐　藤　由香里：紙の本を脅かす電子書籍
竹　田　麗　華：日本における電子書籍普及の条件
二川原　千　景：雑誌メディアと社会変容～世界で最も影響力のある雑誌「VOGUE」～
加　藤　諒　大：音楽再生機器の歴史と音楽鑑賞の展望について
佐々木　純　一：人間と非人間とは何が違うのか？
新　谷　彩　佳：医療技術を用いてヒトの能力を改良する事の問題について

・指導教員　常見信代

上　野　香　織：美味しいイギリスの旅
中　村　紘　基：社会主義者ウィリアム・モリス―美しい社会のために―
樋　口　真　伍：ブリティッシュ・パブ―労働者の避難場所―
真　鍋　勇　磨：イギリスにおける移民問題
宮　本　朋　子：'The Queen' ～女性が「国王」になった時代～
山　口　詩　織：イギリス人、オールコックが見た幕末ニッポン
山　田　　和：イギリス競馬―その歴史を辿る―
蟻　馬　冴　子：ビアトリクス・ポターと湖水地方～ピーター・ラビットの世界～
坂　本　まどか：アイステッズヴォッドにみるウェールズ文化の創造と復興
吉　田　美　穂：ジェントルマンとジェントルマン教育～チェスターフィールドを中心に～
秋　山　卓　志：イングランド宗教改革

・指導教員　濱　忠雄

安　部　麻衣子：死刑執行人の目線から見る死刑制度
大　野　舞　子：フランス革命と女性たち
小　倉　正　裕：冷戦下におけるヨーロッパ諸国の動向―米ソ二大国の狭間で―
小野寺　　徹：サロン文化―女性文化の頂点　時代の変遷から見る思想形成―
鎌　田　吉　和：黒人奴隷と白人―奴隷制、人種差別、白人性―
鈴　木　億　也：中世ヨーロッパで起きた魔女狩りという悲劇
中　村　有　花：ポンペイ―甦った古代都市―
原　田　綾　佳：キリスト教におけるワインの役割
前　田　　望：ジャンヌ・ダルクの本性
小　松　美　里：バルト三国リトアニア
浅　野　睦　美：共生社会へ道筋と課題―複数の根からなるあらたな集団的アイデンティティを求めて―
小　島　尚　樹：アメリカ黒人の歴史―奴隷制廃止から現在、そしてこれから―
今　野　　恵：ホロコースト―犠牲になった人びと―
関　山　直　樹：スイスの教育実践家 " ペスタロッチ " について―彼の思想とその思想がもたらす、現代教育への教育的価値―
高　安　祥　之：日仏文化交流史―アニメーション・マンガによる文化交流―
星　　美　里：エルネスト・チェ・ゲバラ―しがらみに囚われない永遠の旅人―

・指導教員　本城誠二

荒　井　翔　伍：2 枚のアルバムから見える Nirvana の姿
斉　藤　壮　矢：*Lady Gaga* と奇跡
作　山　裕　亮：ヴィヴィアン・ウエストウッド―ファッション界における革新―
嶋　津　玲　奈：50 年代～ 60 年代のイギリス若者文化の形成―音楽・ファッション編―
瀬　尾　　愛：イングリッシュ・ドリーム―日本とイギリスの住宅事情―
竹　中　愛　美：MICHAEL JACKSON―稀代のエンターテイナー―
中　島　明　里：多様化するアメリカン・ファミリーと離婚問題
工　藤　愛裕詩：*The Great Gatsby* に込められた

メッセージ
青　木　　舞：*Les Miserables*―「哀れな人々」に渦巻く愛
近　澤　卓　哉：禁酒法―全米を揺れ動かした魔の 14 年間

・指導教員　安酸敏眞
石　川　　隆：団塊の世代に生まれて
伊　藤　瑞　季：エドガー・アラン・ポーと探偵小説
小　池　瑠　莉：ジャン・ジロドゥによる古代伝承のフランス化
近　藤　沙亜矢：教会と結びついた中世ヨーロッパの学校―キリスト教世界における学校教育―
中　村　みのり：古代・中世における神秘的な水と人間の関わり―歴史から未来を考える―
長　沼　　究：グローバル化社会に求められる教育制度
松　井　絢　祐：フロイトの人間観に迫る
北　見　潮　里：パリ・コレクションの軌跡
佐々木　翔　平：グリム童話
佐　藤　穂奈美：女性とセクシュアリティー―聖書と現代の視点から―
能　登　朝　紀：エロスと神話と美術
友　田　大　志：アテナイとソフィスト

・指導教員　米坂スザンヌ
高　岡　木乃実：What Conceptual Differences Occur in English　→ Japanese translations?
理寛寺　文　音：Canadianisms
小助川　雅　実：The Relationship between English Education and *Katakanago*
酒　井　裕美子：The Impact of English Education in Elementary School on Junior High School
武　市　麻　里、村　山　琴　美：Fashion and English
常　富　雅　人：English Education for Elementary Schools in Finland

表紙「使犬食餌」図
彩色、26.7×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』坤所収　北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永9［1790］－天保15［1844］）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化5（1808）年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8（1811）年に幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2（1855）年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』坤巻の巻頭「産業部」の「使犬」に収められている。本文冒頭に「此島の夷生産の第一事となす者は使犬なり」とあるように、犬は艚・船を挽き山猟の助けとなるなど、生活・生産に不可欠の存在であった。各家が5～6頭から12～3頭の成犬を、図のように庭に建てた衡木に一犬毎に繋ぎ置き、家族同様撫育する様は「實に小児を養育するが如し。故に犬の夷を慕う事も亦嬰児の母を慕ふがごとく……」とある。

その食餌は「大抵一日中一・二度なるべし。生魚の肉を食せしむる事なし。能く乾魚を煮熟してニヤムと称せる木器に盛り、ニ・三犬をして同食せしむ」とある。児犬については「食餌も亦同じといへども、魚骨を食せしめず、肉のみ小割して是を食せしむ」と気遣っている。喜び勇んで食べる児犬達、ご馳走を前に順番を待ちきれずに飛び跳ねる犬達、和やかで微笑ましい光景である。　（北駕文庫　佐々木光子記）

編集後記

盛夏の候となりました。暑い日が続き、昨年の猛暑が思い出されます。

さて、「人文フォーラム」第39号をお届けします。現在の形での発行は、次回までとなりそうです。ご投稿くださいました皆様に、こころより御礼申し上げます。　（池内　静司）

四月から本学に新任教員として着任したばかりで何事も不慣れでいたところ、編集のお仕事はほとんど池内先生がやって下さいました。頭の下がる思いです。原稿をお寄せ下さった皆様にも心より感謝申し上げます。人文学を通じての、人と人との繋がりを思います。　（井野　葉子）

人文フォーラム 39：2013年8月2日発行　編集人：池内　静司、井野　葉子　発行人：郡司　淳
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161）　印刷：㈱アイワード